

# 六 花 10



俳句雑誌りつか  
2017 (平成29年)  
cover design Yuna Mizuno

七回を産まれ変りし落葉かな  
待宵をかこちて髪の手櫛かな  
しあはせの村の煙や紅葉雨  
二人して柿盗人や湯の帰り  
秋雨して七光年はどのあたり  
弘徽殿の墓へ傾き曼殊沙華  
十二妃に琴弾坂の後の月  
月の琴弘徽殿をこそ慰めめ  
有馬富士ぞんがい低し十三夜  
秋風や玉垣内の花山院  
仲秋の菩提大樹の実を仰ぐ  
椿の実琴弾坂を一目散  
夕さりの日のおこぼれを葛の花



昼の虫消え入りさうな尼寺かな  
秋風に吹かれてまるぶかたつむり  
実り田の道をよぎれる毛虫かな  
月影の荒神橋を水くぐる  
顔撫でる手もなく秋の石仏  
十六夜の雌岡山を離る印南かな  
入れ替る水も水なり雁渡る  
俱会一處十二妃にこそ赤のまま  
稲実る尼寺の里をあとにせし  
曲がるたび胸突八丁法師蝉  
来年の今頃行かむもさ曇り

※弘徽殿(こきでんの女御)、『茶花物語』巻三、琴弾坂(ことびきざか)享くる(うつくむ)雌岡山(めつこ)俱会一處(ぐいはいつしよ)尼寺(にんじ)もさ曇り(もさ曇り)猛者海老の取れる頃の曇り

雪嶺抄

鮎の鑑札

笹村 政子



合歡咲いてますます遠き家郷かな  
夏菊を手桶に母の見当たらず  
サングラスはづし昔のままの駅  
午過ぎの卓に熟れくる実梅かな  
鮎釣の鑑札壁に父逝きぬ  
夕闇の障子にはがす黄金虫  
亀の子のなんなく落ちてしまひけり  
夏越かな馬曳いて川にごり立つ  
捨て竿の糸張りゐたる梅雨晴間  
夫の連れきし桂林の竹婦人

雪卿集 せつけいしゅう

深梅雨

佐津のぼる

昼寝

出口

誠

新茶汲む老いてもときに差し向かひ

昼寝かな妻のいびきを聞きながら

衰残の身のよこたへる籐寝椅子

呼ぶ声に反応しない午睡かな

昼寝覚め枕にしたる辞書固く

起きたるはわれ一人のみ夏の午後

手料理褒め母よろこばす帰省かな

いすの裏メモだらけなり夏の午後

深梅雨や画鋏の錆びる告知板

恰幅の良きアニメキャラ夏の夜

白蛇

永田万年青

立ち話

升田ヤス子

睡蓮の葉をすべりみる白蛇かな

立ち話日傘の罨にはめられて

あがりたる骨のもろかり五月雨るる

花菖蒲いとらうたげに萎みけり

緑蔭に入りてしばらく動けざる

乱気流夏蝶の飛ぶそのあたり

象鼻杯気づかぬうちに酔うてをり

楊梅をもぐ陸橋に手をおよがせ

天空に蜘蛛の囀かがりをりにけり

青しぐれ庭師に鬼門開けやれば

夏蝶

志方 章子

去年よりも小さく咲けり鉄線花  
媚ぶるかにぞろりとそよぐ夏柳  
若葉風そこはかとなく匂ひけり  
池渡りきて夏蝶の地に伏しぬ  
いくばくの風に震へて雪の下

青芒

藤生不二男

さざなみの豊かに生るる青芒  
白鷺の背負ひし光こぼしけり  
池の面の水は平らに蝉涼し  
城垣のそりたる石に蜥蜴反る  
両の手に猫垂れ下る暑さかな

# 山際は朝ひぐらしにそまりけり

菊谷 潔

やまぎわはあさひぐらしにそまりけり きくたにきよし

山際は朝ひぐらしにそまりけり

悲しみを蝸生きる今日一日

空梅雨はあけてますます夏の空

わが祈り天に届けと蝉時雨

蝉しぐれ頭にジーンかき氷

全体の雰囲気や傾向がおしなべて同じになっていることを一色になっている、というが、句は、蝸の鳴き声に支配されてしまっている状態を、色で染められているかのように表現。朝は明るく希望の色であるはずが、逆に日暮の寂しく侘しい色を感じ取っている。山際は季節によってさまざまな色を見せる。がこれは蝸を耳で見た色。



# 万九千の神を足蹴に蜥蜴跳ぶ

延川五十昭

日沈の宮やさしかり西日かな

八百萬の神も暑しよさざれ石

神籬の神の宿りし青田風

万九千の神を足蹴に蜥蜴飛ぶ

五十猛の神の怒りの日雷

まくせんのかみをあしげにとかげとぶ のぶかわいそちぎ

万九千神社の磐座にいた蜥蜴が、何かに驚いて跳んだ。急に目の前を跳んだ蜥蜴に作者も驚いて飛び退いた。そこですかさず「蜥蜴は不遜にも神を足蹴にした」と機転を利かした大意即妙の句にした。

※万九千神社（まくせのやしろ）は島根県出雲市斐川町にある神社。神在月に全国から出雲へ集まった八百万の神が最後に立ち寄る神社という。地元ではまくせん神社と

# 雪樹集

きりぎりす

田尻 勝子

紙石鹼

廣畑 育子

きりぎりす時折鳴いて一昼夜

人知れず山守り稲荷花萱草

生ひ立ちにくちなしの花苦くして

土用餅湯の山径を買ひに来て

君の背を撫でてはつとす夏の瘦

この茗荷はるか熊野の奥より来

夏草の面倒臭げに白い花

合歓咲くや泡立ちの良き紙石鹼

茶のボトル転がし騒ぐ青嵐

たつぷりと父の西瓜は塩振らる

白鱧 赤松有馬守破天龍正義

夏暖簾 谷口 一献

白雨かな漸く家に辿り着く

酒の座の透けて見ゆるや夏暖簾

白鱧の框に残る鱗かな

妻のゐて短夜の酒長くなり

象鼻杯一人は大のお酒好き

震度一有りしと覚ゆ水中花

浮島の夏の柳に鷺一羽

浴衣の娘中国訛り気にならず

何もかも見られてゐたる水中花

ひんやりした枕に代へし半夏生

肌着

溝渕 弘志

まとひ付く猛暑の肌着脱ぎにけり  
食べにけり顔よりでかいかき氷  
氷水でこぼこへこむやかんな  
西瓜食ふ海に向かつて種飛ばす  
雷のきらひな娘偲ぶる

出雲

延川五十昭

日沈の宮やさしかり西日かな  
八百萬の神も暑しよさざれ石  
神籬の神の宿りし青田風  
万九千の神を足蹴に蜥蜴飛ぶ  
五十猛の神の怒りの日雷

半夏生

住田千代子

夏暖簾

谷口 一献

竹の花見たさに藪に踏み入りぬ

酒の座の透けて見ゆるや夏暖簾

紫陽花のてんまりてまり揺れにけり

妻のゐて短夜の酒長くなり

雨となる匂ひの中の夏至夕べ

震度一有りしと覚ゆ水中花

風呂釜の傷み始めし半夏生

浴衣の娘中国訛り気にならず

風鈴の鳴る時赤子泣き止みぬ

ひんやりした枕に代へし半夏生

# 蛭雪譚

六甲選

二十九年十月号鑑賞と随想

竹の花見たさに藪に踏み入りぬ

住田千代子

俳人としての興味、好奇心が表面に出ていて面白い。真面目一方の人こそこういう句に踏み込むのは大切。この句のようにすくなくとも危険を伴うような恐れがあっても、竹の花を見てみたいという、好奇心が恐れを上回っている。恐れといても、危険の及ぶような物ではないかも知れぬが、主宰はヤブ蚊に刺されるのが何より怖く、毒蛇が出たり、竹を伐った時の鋭い切り口で足を怪我したりする危険が潜んでいる。でもそういう恐怖を恐れず藪に入るといふ勇氣は素晴らしい。千代子に無鉄砲の氣持が潜んでいることを密かに喜ぶ。そういう氣持が俳句境涯を一段上げると期待している。

梅雨明けや四半世紀を師と慕ひ

平居 滯子

四半世紀とは百年の四分の一。世紀を四つに分けたつまり二十五年になる。えつ、もしかして六甲のことかしらん。慕ってもらえるのは大変ありがたいことで、申し訳ない気がする。



主宰はすぐく悲観主義で、梅雨が明けたら本格的な夏になって、盆過ぎてすぐに秋が来ると思ってしまうのだ。それでも早くこの暑さが過ぎてくれないかと反対の気分も同居しているややこしい性格なのです。どうか後悔しませぬように。「くちなしの香や放心のひとつときに」クチナシの匂いについては田尻勝子の句のところに書いた。「梅雨晴間古墳息づく靄立てり」滯子の住んでいる住まいには目と鼻の先になる古墳の景色が毎日変化する。それを詠める環境がうらやましい。揚花火の句、闘病記の句も佳い。

六花集



神無月到着順

平居 滯子

入梅や古墳の緑猛々し  
梅雨の墳濠を隔てて異界めく  
梅雨冷や安価な古書の蔵書印  
天皇陵夏至の夕日を引き込みぬ  
聖書開く泰山木の花の下

善野 焔

著莪咲くや水の匂ひの子規の庭  
子規庵の庭の藤には遅れたり  
開け放つ茶屋縦横に初夏の風  
蜷蛄の餌を離して落ちにけり  
万緑の中や蛙塗る水の音